

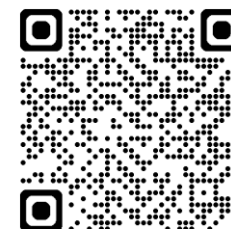
# 魂の修行場であった鯉淵学園



公益財団法人 鯉淵学園

鯉淵学園農業栄養専門学校

<https://www.koibuchi.ac.jp/>



# ■魂の修行場であった鯉淵学園（Ⅰ）

鯉淵学園の前身は満蒙開拓幹部訓練所及び指導員養成所でしたが、その後満州に渡った者たちがどのような運命を辿ったのか。

満蒙開拓幹部訓練所及び指導員養成所で数ヶ月の訓練を終えた幹部や指導員は、開拓団の「団長」や「指導員」として満州へ送り出されました。終戦を迎え、彼らは「教え子や開拓民を連れて逃げる」という極めて困難な責任を負うこととなり、ソ連軍との戦闘や、絶望的な避難の中で、自ら命を絶つ、あるいは最後まで団員を守って亡くなった指導員が数多くいました。彼らはまた、現場のリーダーであったため、ソ連側から「軍事組織の幹部」とみなされ、優先的にシベリアへ連行・抑留されました。

満蒙開拓幹部訓練所および指導員養成所を経て満州に渡った人たちのうち、約3分の1の人が帰らぬ人になったと推計されています。生き残った幹部・指導員たちの多くは、戦後再び、鯉淵の地に集まったそうです。満州に渡った指導員・幹部たちは、青少年義勇軍の少年たちを導く立場であり、戦後は「教え子を死なせてしまった」という重い精神的苦痛を抱えながら、日本の農業復興に尽くすことになりました。彼らは、「銃を持たせる教育」をしてしまったことを深く反省し、これからは「鍬一本で、平和な農村を作るリーダーを育てよう」と誓い合います。鯉淵学園の初代学園長となった小出先生や、指導員養成に関わった人々は、かつての訓練所の建物を利用し、今度は満州ではなく「日本の戦後復興」のための農業教育を開始しました。それが今日の鯉淵学園のスタートとなりました。

戦後の鯉淵学園の教壇に立った先生（特に幹部訓練所の生き残った先生）は、徹底した「土」へのこだわりを持ち、日本の土地を自分たちの手で耕し、食料を守る、という姿勢を持ち、満州で命を落とした多くの教え子たちへの慰霊を胸に、戦後の学生たちに接しました。先生たちは、学生に知識を教えるだけでなく、寝食を共にする「師弟同行」のスタイルを大事にしました。戦後、「農業の東大」とまで称された時代の鯉淵学園の教育は、一言でいえば「魂の修行場」のような厳格さだったそうです。前身である「満蒙開拓幹部訓練所」の軍隊的な規律を土台にしつつ、そこに「平和への祈り」と「土への執着」を加えた、独特かつ過酷なカリキュラムが組まれました。

# ■魂の修行場であった鯉淵学園（2）

最も大きな特徴は、「先生も学生も、24時間同じ釜の飯を食い、同じ汗を流す」、というスタイルです。朝は5時（冬は6時）の起床ラッパや鐘の音で始まり、起床後すぐに、広大な敷地でのマラソン、体操、そして皇居へ向かっての礼などが厳格に行われました。また、「掃除は心の鏡」とされ、教室や寮の廊下はチリ一つ落ちていない状態まで磨き上げることが求められました。

当時の教育の柱は、単なる農業技術ではなく、「労働を通じた人間形成」にありました。当時はまだ機械化が進んでいなかったこともありますが、あえて厳しい肉体労働を課し、荒地を人力で切り拓き、重い肥桶を担ぎ、泥にまみれて働くことが、「エリートの証明」とされました。小出先生は、「理屈をこねる前に土を触れ」と教え、知識だけの秀才を嫌い、現場で誰よりも動けるリーダーを育てるため、スパルタ教育を行いました。夜の時間は、自己を厳しく見つめ直すための精神修養に充てられました。寮の夜には「自修」の時間が設けられ、物音一つ立てることが許されないほどの静寂の中で、読書や内省が行われました。

小出先生をはじめとする一流の講師陣が、農業理論だけでなく、哲学や歴史、世界情勢について熱い講義を行いました。満州で教え子を失った教官たちの言葉には、凄まじいまでの迫力と情念がこもっていたといいます。エリート校といえど、生活環境は極めて質素、あるいは「貧乏」に耐えるものでした。自分が育てた農作物を中心に、決して豪華なものではありませんでした。しかし、「自分たちが作ったものを食べる」という食料自給の誇りが、彼らのプライドを支えていました。学生たちは、非常に冷え込む冬の鯉淵においても、暖房設備などない板張りの寮で、若者たちは布団にくるまって寒さを凌ぎ、結束を強めました。

なぜこれほど厳しくしたのか。そこには、指導者たちの「贖罪」の意識がありました。教官たちの多くは、「かつて満州という新天地へ若者を送り、死なせてしまった」、という消えない傷を抱えていました。だからこそ、戦後の若者たちには、「強靱なリーダーになってほしい」という、祈りに似た厳しさで接していたのです。「頭でっかちになるな、土を愛せ。土は裏切らない」このメッセージが、当時の過酷な教育のすべてを象徴していました。今の感覚からすると「ブラック」に見えるかもしれませんが、当時は、この厳しさこそが、焼け跡から日本を立て直す力になると信じられており、これほどのスパルタ教育を勝ち抜いた卒業生たちは、その後、全国の農村で、「村の王様」と言われるほど信頼されるリーダーになっていきました。